

2017. 10. 3 (火)

三つの時間

奥村 隆

「幸せ」と「仕合わせ」

今回、打樋先生からチャペルメッセージのご依頼をいただいたとき、ちょうど3年ゼミの合宿で徳島の池田というところに行ってきました。「幸せ」って何だろう? というテーマを伺って、なんだか不思議な気持ちがありました。というのは、行きの列車のなかで、社会学部におられた大村英昭先生が井上俊先生とともに編者をされた『別れの文化』という本を読んでいたのですが、そこに収められた2006年の講演の記録で、大村先生が「幸せ」と「仕合わせ」という言葉について話しておられる箇所を読んだばかりだからです。

大村先生はそこで、関西学院のCOEプログラム「人類の幸福に資する社会調査の世界的拠点形成」のことを枕にされているのですが、その英訳で「幸福」には「happiness」ではなく「well-being」を使ったと述べておられます。そして、このふたつの意味は違う、というのですね。happyやhappinessはもともとhappeningに近い言葉遣いであって、間がよい、時がよい、ということの意味する。フランス語のbonheurもそうだとおっしゃるのですが、めぐりあわせがよい、たまたま間がよいという意味だ。これ

に対して well-being のほうは、「福祉」といった言葉と近くなって生活上のことを意味し、なんとなく生活臭が出てくる、という違いがある。

そしてこれは日本語の「幸せ」という言葉にも重なる。広辞苑を見ると、「しあわせ」には「仕合せ」という漢字があてられている。「めぐりあわせ、機会、なりゆき」という意味が記され、そのあとに「幸福、幸運、幸い」と書かれています。この最後の意味に「幸せ」という字があてられる。つまり、もとはたまたまめぐりあわせがよい、という意味の「仕合わせ」という言葉があった、そこから「幸せ」が派生した、というわけです。

「しあわせ」にはほんとうにさまざまな側面があると思いますが、そのもととなる要素がめぐりあわせがよい、偶然・たまたま素晴らしいことに出会った、ということである。大村先生は、洋の東西を問わず、昔の「しあわせ」という言葉にはある種の偶然性とある種のはかなさがあると思う、と話しておられます。たまたま間がよく出会うことができた。でもほんのちょっとしたタイミングの違いで出会うことができなかつたかもしれないし、出会ったけれど時がたつと別れてしまふかもしれない、壊れてしまふかもしれない。そうした「はかなさ」が「仕合わせ」という

言葉には含まれる。

この大村先生のお話を讀んだ直後に、たまたま打樋先生からのご依頼をいただいて、これこそまさに「仕合わせ」(!)と思いましたが、たまたまの出会い・めぐりあわせにこそ「しあわせ」がある、ということは、やはり年をとるにつれて深く実感されることだと思います。人生のほとんど、そしてしあわせのほとんどがたまたまの出会いによって成り立っていて、自分がやろうと思って成り立っていることなんてほんの少しではないかと思うのです。さてどんなお話をしたらいいか、考えをめぐらせたのですが、きのうの晩たまたま(笑)これかな、と思って、「三つの時間」というお話をすることにします。

「工業」の時間

いまからちょうど4年前の秋、私は前任教の立教大学で学部長の仕事をしておりました。われながら向いてないなあと思いつつ悪戦苦闘していましたが、この時期に処理しなければならぬとて難しい案件があり、数週間それに全エネルギーで集中的に取り組むことになりました。ほんとうに難しく、学部担当のある職員の方と毎日夜遅くまで話し合っただけで対応していたのですが、案件そのものとは別のいろいろなお話しもして自分をなんとか支えるというところがありました。そのなかで、その方とお話ししながら思いついたことなのですが、自分が「三つの時間」を生きている、と考えたことがあります。

第一の時間、それはいまこうやって学部長として案件を処理している、という時間です。こういう大学の仕事、組織の仕事をすると時間がある。この時間は、ひとつひとつの案

件がそのつど目の前にあったり、学部の制度やルールの新しい案を出してそれを議論し、手続きを踏んで作っていったりするわけですが、たとえば制度はおそらく数カ月くらいの時間でできていくもので、比較的短いスパンの時間の流れです。いってみれば、これは工場で製品を作るような時間、工業の時間であるように思いました。これには正解があって(いちばんよい設計図のようなものですね)、必要な情報をできるだけ集めて、これが目的で、この条件ならこれが最適解だ、というのがあり、たとえるならばあるスペックのコンピュータがそれを演算処理して答えを出し、工程を踏んで製品を作る。できるだけ正しい答えに、できるだけ早く辿り着くのがよいわけですね。そうやって学部を運営する。

私たち研究者・大学教員の仕事のひとつはこういうもので、なんとか長だったりなんとか委員だったりしますが、これを誰かがしなければ大学という組織は回らない、とても重要なものです。また、目の前の案件を処理できた、数カ月努力して制度ができた、といったわりあい短い時間で成果・結果が見えるものでもあり、それには充実感があります。ただ、これはとりかえがきく。他の人が同じ役職、たとえば学部長をして、もちろん正確さや速さは違うだろうけど、必ず答えに辿り着くのです。むしろ組織が続いていくためには、とりかえがきかないといけないうけです。かわりの人がいないといけないうけです。そして、研究者になるという人たちはそういう仕事をやりたくて研究者になったわけではなく、むしろそれに向いてないからなった、というところがあるわけです。でも間違いなくとてもだいたい仕事で、成果があがったとき幸せな気持ちもわいてくるものです。

「農業」の時間

ですが、これとは違う第二の時間がある。それは教育の時間です。工場で製品をつくる工業の時間と対比するなら、これは農業の時間のようなものだと思います。種を蒔いて、芽が出て、育って行って、実がなり、収穫する。育っていくのは稲なり麦なり、野菜なり果物なり、その植物のほうなのですね。教員がやることは、その学生が成長していけるように、水をやったり、肥料をやったり、日をあてたり、日蔭にしたり、風通しよくしたり、雑草を抜いたり、そういうことなんだと思います。成長していくのはその学生の自分の力であって、それをほんの少し手伝う、というのが教師の仕事なんだと思います。

これは工業の時間より長いスパンの時間だと思います。たとえば卒論を1年かけて指導して、学生が最初思っていなかったようなおもしろい卒論を書く。そのあいだに明らかに学生は成長します。2年とか2年半とか、ゼミで学生と一緒にいて指導する。1年生に入学した学生が4年生で卒業する、このあいだに学生はほとんど別人のように成長しますね。毎年秋には収穫があるのと同じような、手応えやよろこびがある仕事です。

そして、これはたぶん工業よりはとりかえがきかないです。私が指導するのと、ほかの先生が指導するのでは成長の仕方が違うところが確かにあると思います。でも育っていくのはやはり学生自身で、ほかの先生が指導しても、その子の力でちゃんと成長していくのですよね。だから工業よりは少ないですが、とりかえがきくところはあるわけです。ただ、たまたまその学生と出会う、指導していくと、卒業してもときどき会うようにな

る、ということもあつたりします。それはたまたま出会ったのが、とりかえがきかないような関係になっていく、ということかもしれませんね。これはじつに幸せなことです。

もうひとつの時間

ですがさらにもうひとつの時間、第三の時間があります。研究の時間です。研究者がこれが「本業」です。これはどんな時間かという、工業のように数カ月で製品ができるのでも、農業のように年単位で収穫があるのでもない。いつできるかわからないのです。あるアイデアと別のアイデアが結びつく。でもそれがいつそうなるかわからない。考え始めて1か月後とか1週間後とかにできることもあるかもしれないし、1年、3年、5年、あるいは10年後にやっと結びつくかもしれない。まるで宝探しのような時間です。いくら本を読んで考えても、データを集めても、ずっとなにも生まれぬ時間が長く続くときもある。いやそのほうが多い。いつ成果があがるかはほんとうにわからない。予想できるような答えは、それは予想できたものですから、たいしたものではないわけです。最初思いもしなかった答えに辿り着く。それはいつ起こるかわからないという時間です。

これはほんとうにきつい時間の流れです。結局宝なんて見つからないんじゃないか、と思うときもよくあります。いっぱい無駄をして、試行錯誤して、でもある瞬間にたまたまつながる。考えてもいなかった答えがたまたま見つかる。よい論文だと思ふものが書けたときは、最初そんなこと書こうと思っていなかったことを書いた、あとから振り返ってどうしてこんなこと書いたのかわからない、と

ということが多いです。だから、私はこの宝探しの時間だけで生きる、といわれたら、ちょっと無理だと思います。天才のような人は別だと思いますが、ふつうの人は耐えられないんじゃないかなと思います。だって、ほとんどの時間、宝なんて見つからないんですから。ほんとうにときどき、たまたま答えが見つかる。とくに社会学の場合、正解がない答えを探しているわけなので、ほんとうにたまたまです。また、以前ひとつ宝を見つけました、という人は、次はもっと素晴らしい宝を見つけなくちゃいけない。過去の仕事は過去のものですからね。だから、工業の時間、農業の時間、宝探しの時間の三つの時間を往復することで、なんとかやってきてるんじゃないか、と思います。数カ月で制度ができあがった、1年とか4年とかで学生が成長した、そうした成果が実感できる時間を生きながら、いつ成果があるかわからない宝探しの時間をなんとか生きているんじゃないかと思うんです。

ただ、この三番目の時間が研究者の「本業」です。これをやるために研究者という仕事に就いた。そして、これはもうまったくりかえがきかないです。その宝物を見つけられるのは私だけなんです。誰でもが辿り着く正解ではなく、私だけが見つけたこんなつながり方、こんな答え方がある。ほかの人には決して思いつかない答えを見つける。これはほんとうにときどき、ほんとうにたまたま起きることですが、でもほかの人とはとりかえがきかないことをしているのです。研究者とは、そのたまたまのよろこびのために仕事している人なのだと思います。

出会いのしあわせ

工業の時間、農業の時間、宝探しの時間、この「三つの時間」を往復しながら生きていく。こんなことを、4年前、難しい案件に日々向かい合いながら、考えるようになりました。それでずっと楽になったところもあり、いまでも大切にしている考え方です。

さて、「「幸せ」って何だろう？」というテーマからは少し離れたお話をしてみました。ただ、大村先生がおっしゃる「仕合わせ」、たまたまめぐりあうハプニングのようなハッピーネスのことは、少しお話しできたかもしれませんね。三つのうちどの時間がいちばん幸せか、というと、これは難しいところがあります。もちろん、自分だけが考えつく答えにめぐりあったときは、ほんとうに幸せです。でもそれはほんとうにときどきで、だいたい時間が何も生まない時間です。学生さんたちの成長を手伝う、これはやっぱりとても幸せなことですね。そこでたまたま出あって、大人になってからもずっと付き合っていくような友人を得ることもしばしばです。工業の時間は、これはやはり向いていないですし、あまりエネルギーを割きたくないところがあります。でも難しい案件に取り組むなかで、心から信頼できる人に出会うというじつに素晴らしいこともある。これもほんとうにめぐりあわせ、たまたまです。……というところで、そろそろよいタイミングですね（笑）。これで私のお話を終わりにします。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)